

設備導入の規定・法令チェックを、AIエージェントで

確認業務の効率化とチェック漏れ防止に向けて



株式会社エアー

ご相談内容の理解｜設備導入時の規定・法令チェック

設備を導入するたびに、社内規定と関連法令に照らして「問題がないか」を人が一つずつ確認されています。まずは現行フローと、そこで起きている課題を整理しました。



現場で起きている4つの課題

探すのに時間がかかる

規定・要領・法令・過去の申請書が別々の場所にあり、該当箇所にたどり着くまでが長い

属人化している

「どの条文を見るべきか」の勘所が一部のベテランに依存している

改訂に追従しづらい

法令改正や社内規定の改訂を、現場の判断に反映しきれない

チェック漏れのリスク

確認項目が明文化されておらず、見落としに気づく仕組みがない

© 2026 AIR Co.,Ltd.

課題の本質｜判断基準が「人の頭の中」にある

規定も法令も文書としては存在しますが、「今回の設備で何を見るべきか」という判断の型が文書化されていません。ここをAIが持てる形に置き換えることが出発点です。

現在：人が都度つなぎ合わせている

文書は分散
社内規定／要領／法令／過去申請が別管理

判断は暗黙知
どの条文が効くかは経験で補っている

結果が残らない
確認の根拠が個人のメモで終わる

あるべき姿：AIが型として保持

知識を一か所に
規定・法令・過去事例を横断検索できる状態に

判断をルール化
設備種別ごとのチェック観点を明文化

根拠が残る
判定結果と参照条文がセットで記録される

© 2026 AIR Co.,Ltd.

目指す姿｜一次チェックはAI、最終判断は人

AIに判断を任せきるのではなく、「調べる・洗い出す・根拠を揃える」までをAIが担い、人は判断とリスク評価に集中する役割分担にします。

AIエージェントが担う範囲

- 設備情報から適用されうる規定・法令を洗い出す
- チェックリストを自動生成し、項目ごとに判定
- 判定の根拠となる条文・社内規定を引用して提示
- 不足している情報・確認が必要な点を指摘
- 確認結果をレポート／記録の形式で出力

人が担う範囲（最終責任）

- AIが挙げた論点の妥当性を確認する
- グレーゾーンの解釈・リスクの度合いを判断する
- 社外・行政への確認要否を決める
- 最終承認と、責任を持った意思決定
- AIの誤りや不足を指摘し、次に活かす

© 2026 AIR Co.,Ltd.

AIエージェントは「一緒に育てていく」もの

導入時点で完璧な精度は出ません。使いながら指摘し、その指摘をルールとナレッジに反映していく――この循環を回せる仕組みであることが、この業務では最も重要です。

① 使う
実際の案件でAIに一次チェックさせる

② 指摘する
違う・足りない箇所を担当者がその場で指摘

③ 反映する
指摘をルール／ナレッジとして登録

④ 精度が上がる
次の案件から指摘済みの観点が効く

⑤ 広げる
対象設備・対象法令の範囲を拡大

育てるサイクル

育てる前提で設計する

現場が直せる
指摘・修正を情シス経由にせず、業務部門が登録できる形にする

何を直したか残る
ルールの追加・変更を版管理し、いつ誰が育てたかを追える

効果が見える
指摘件数の減少・所要時間の短縮を定点観測して改善を実感できる

© 2026 AIR Co.,Ltd.

何を育てるのか｜3つの層に分けて蓄積する

「AIを育てる」を曖昧にしないため、育てる対象を3層に分けます。層ごとに担当と更新のタイミングが変わります。

知識層

参照する文書そのもの

- 社内規定・設備管理要領・安全基準
- 関連法令・条例・ガイドライン
- 過去の申請書・確認記録・指摘事例

更新：規定改訂・法改正のタイミング

ルール層

チェックすべき観点の定義

- 設備種別ごとのチェック項目
- 適用条件（容量・設置場所・用途など）
- 必須確認 / 参考確認の区分

更新：現場からの指摘が出たその都度

判断の型層

AIの答え方・進め方

- 根拠条文を必ず添えて回答する
- 判断できない場合は「要確認」を返す
- 出力フォーマット（報告書・記録様式）

更新：運用レビュー時（月次など）

© 2026 AIR Co.,Ltd.

アーキテクチャ全体像

既存の文書・システムはそのまま活かし、AIエージェント層を上に載せる構成です。社内データは外部に出さず、権限に応じて参照します。

① 利用者

- **設備導入の担当者**
- **設備・保安部門**
- **品質／法務レビュー**

② AIエージェント層

- **要件抽出**
  設備情報から
  条件を構造化
- **関連条文検索**
  規定・法令を
  横断検索
- **適合判定**
  ルールに沿って
  項目ごとに判定
- **根拠付き出力**
  条文引用つき
  レポート生成

③ 知識・ルール層

- **社内規定・要領**
  文書管理／SharePoint
- **法令・ガイドライン**
  官公庁公開情報
- **チェックルール**
  設備種別ごとの観点
- **過去の確認記録**
  申請書・指摘履歴

全レイヤーを横断してガバナンスを適用：アクセス権限の継承／参照ログ・監査証跡／文書の版管理／社内データは学習に使用しない設定

© 2026 AIR Co.,Ltd.

チェック処理の流れ｜入力から記録・学習まで

担当者は設備の情報を入力するだけで、確認すべき項目と根拠が一覧で返ります。最後の承認とフィードバックが、次回の精度につながります。

1 設備情報を入力
設備種別・容量・設置場所・用途・図面等

2 適用範囲の特定
対象となる社内規定・法令をAIが洗い出す

3 チェックリスト生成
設備種別のルールに沿って確認項目を展開

4 項目ごとの判定
適合／要確認／情報不足を根拠条文つきで提示

5 担当者レビュー
内容を確認し、修正・補足・最終承認

6 記録とフィードバック
結果を記録し、指摘をルールへ反映

⑥で蓄積された指摘が③④のルールを更新し、次の案件では同じ指摘が不要になる（育てるサイクル）

© 2026 AIR Co.,Ltd.

安心して使うための仕組み｜根拠・権限・記録

法令に関わる業務のため、「AIがそう言ったから」で終わらせない設計にします。根拠と記録が残ることが、業務として使える前提条件です。

根拠を必ず示す

判定結果には参照した規定名・条番号・該当箇所を添付。
担当者は原文に1クリックで戻れる。

答えないという選択

情報が不足する場合は無理に判定せず、
「要確認」と不足情報を明示して人に返す。

参照範囲の制御

既存のアクセス権限を引き継ぎ、
閲覧できない文書はAIも参照しない。

版管理と改訂追従

規定改訂時は参照先を切り替え、
どの版に基づく判定かを記録に残す。

監査証跡

誰がいつ何を問い合わせ、
どう判断したかをログとして保全する。

データの取り扱い

社内データを外部モデルの学習に使わない構成。
利用環境・保管場所を明確にする。

© 2026 AIR Co.,Ltd.

導入ステップ｜小さく始めて、育てながら広げる

最初から全設備・全法令を対象にせず、対象を絞って「育つこと」を確かめてから広げます。

STEP 1
PoV｜価値の確認

- 対象を1設備種別・数件の過去案件に限定
- 現行の確認結果とAIの出力を突き合わせ
- どこまで任せられるかの線引きを確認
- 育てる運用が回るかを実地で確認

ねらい：使える手応えと課題の見極め

STEP 2
業務適用｜現場で使う

- 対象設備・対象規定を拡大
- チェックリスト・出力様式を実務仕様に
- 指摘をルールへ登録する運用を定着
- 権限・ログ・記録の運用ルール整備

ねらい：日常業務としての定着

STEP 3
定着・拡張｜横展開

- 他拠点・他事業所へ展開
- 関連業務（申請書作成・更新管理）へ拡張
- 蓄積したナレッジを教育・引継ぎに活用
- 効果測定と継続的な改善サイクル

ねらい：全社の確認業務の標準化

© 2026 AIR Co.,Ltd.

効果の見方｜何をもって「効いている」と判断するか

効果は感覚ではなく、PoVの段階から同じ指標で測ります。数値は現状値をベースラインとして設定します。

確認にかかる時間

該当規定・法令を探し、判断するまでの所要時間

▶ 現状値との比較

チェック漏れの指摘件数

レビューや監査で後から指摘された件数

▶ 減少をねらう

レビューの往復回数

有識者への確認・差し戻しの回数

▶ 減少をねらう

担当者による差

同じ案件での確認項目のばらつき

▶ 標準化の度合い

AIへの指摘件数の推移

「違う・足りない」と指摘された件数の変化

▶ 育っている証拠

ナレッジの再利用率

登録したルールが実案件で使われた割合

▶ 資産化の度合い

© 2026 AIR Co.,Ltd.

次のアクション

まずは実際の案件を1〜2件お預かりし、現在の確認結果とAIの出力を比べるところから始めさせてください。

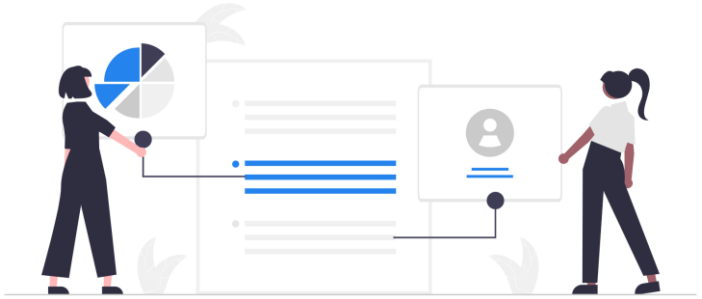
1	**対象業務のヒアリング**	対象設備・確認の流れ・関わる部門・ 現在お使いの文書の置き場所を伺います	**90分程度**
2	**サンプル検証**	過去案件をお借りし、AIの一次チェック結果を 実際の確認結果と突き合わせてご覧いただきます	**2〜3週間**
3	**PoV計画のご提示**	対象範囲・進め方・体制・評価指標を 具体化してご提案します	**検証結果を 踏まえて**

AIエージェントは、導入して終わりではなく、お客様と一緒に育てていくものです。

© 2026 AIR Co.,Ltd.

AIで業務を "完了" させる時代へ

AIR-NEXUS が、企業の "業務OS" になる





AIR-NEXUS お問い合わせ・資料請求

サービスページ：https://air.co.jp/anx/

株式会社エアー



AIR COMPANY LIMITED

© 2026 AIR Co.,Ltd.